

神戸市文書館と池長孟

この神戸市文書館は、もともと南蛮美術館だったのをご存知ですか。

それも、昭和初期に有名な富豪だった池長孟氏が、神戸を世界的な文化都市にしようという意図で、莫大な私財を投じて、世界的に有名な美術品を体系的に収集され、私立美術館として公開したところから始まっています。

池長氏の世界的美術品収集への情熱は、1枚の絵を買うため1軒の別荘を売ることさえありました。苦心の末収集した7000点以上の一流美術品のために、小川安一郎氏設計のアール・デコ調のしゃれた美術館を建て、昭和13年(1938)5月に「私立池長美術館」を開設し、昭和15年(1940)4月より一般公開しました。

戦後、池長氏より神戸市が美術品ごと館を譲り受け、昭和26年(1951)に「市立美術館」として開館。昭和40年(1965)4月に「市立南蛮美術館」と改称しました。

昭和57年(1982)11月には京町筋に新設の「神戸市立博物館」内に「南蛮美術館」を設け、発展的に美術品を全部移転したため、こちらは閉館しました。改修や書庫新築を経て、平成元年(1989)6月、「神戸市文書館」として、新たに開館し、現在に至っています。

以下、池長孟氏とそのコレクション(現在神戸市立博物館所蔵)の一部をご紹介します。

池長孟



池長孟(1891~1955)

かつて神戸に^{いけながはじめ}池長孟(1891~1955)という人物がおりました。

由緒ある兵庫の町の名家の主人でしたが「つつら世間を見るに、お金つかいの名人はあまり見当らぬ」といいながら、その財産をつぎこんで南蛮美術品を蒐集しました。

彼は「蒐集は、一つの創作であります。」という信念を掲げ「日本で製作された異国趣味美術品」の集大成をめざします。エキゾチックに浮き身をやつした池長は、みずからを「南蛮堂」と号しました。

さらに昭和15年(1940)には「神戸のような国際大都市にして、美術館の一つも持たないということは、国民教養の程度も察せられて大きな国辱である」と考えて、自分で美術館を作り、コレクションを一般に公開しました。育英商業学校の校長でもあった池長は、学校教育よりも社会教育の方が大切だと考えたのです。

池長美術館は昭和19年まで展示会を続けましたが、戦争によって閉鎖。戦後は再開どころか、財産税のためにコレクションも切り売りしなくてはなりませんでした。美術品の散逸を何よりもおそれた池長は、昭和26年、ついに美術館を神戸市に譲ることを決意します。現在の神戸市立博物館は、このコレクションを受け継いだものです。



聖フランシスコ・ザヴィエル像
(江戸時代初期)

日本が西洋世界と接触を持つようになった近世の初期。ヨーロッパ人の指導のもと、日本人が初めて「洋画」を描くようになりました。

これらの多くはキリスト教と密接な関連があったため、鎖国と禁令によって大部分が消滅してしまいましたが、幸運にも今日までつたえられたものもあります。

池長は昭和7、8年頃から初期洋風画を精力的に蒐集しはじめました。

このザビエル像が発見されたのは大正9年(1920)。洋風美術に関心をもち始めて以来、池長の熱望的でありました。これらのキリシタン遺物の発見に功績があった藤波大超の斡旋を得て、垂水の別宅とひきかえに、ついに彼はその悲願をかなえることになりました。



ひんかいとじょうず
濱海都城図 (江戸時代)

荒木如元筆

大阪の画家・青木大乘から750円で購入したものの。昭和5年(1930)9月、池長が初めて手に入れた肉筆の長崎系洋風画です。こちらはサインも何もなく、如元の作とするのは画風上の特徴によっています。



なんぼんびょうぶ
南蛮屏風 (桃山時代)

狩野内膳筆

この屏風絵が発見されたのは、奈良県のある旧家。南蛮屏風の蒐集の先駆者は永見徳太郎でしたが、彼はこの狩野内膳本の存在を知らなかったようです。これを入手した昭和7年(1932)から、池長は、永見をしのぐ随一の洋風美術コレクターとして邁進することになりました。